



竹内街道を走る南海バス（昭和29年～）

〜地域を歩き・地域を感じよう〜

竹内街道と 金岡・長曾根 探訪マップ



金岡町大道付近

たけのうち 竹内街道とは

竹内街道のルートは、堺の大小路を起点にして、東に向い金岡を通り、松原市岡、羽曳野市古市、太子町山田から二上山の南・竹内峠を越えて、奈良県当麻の長尾神社に至る全長約28kmの街道といわれています。

この街道は、日本書紀の推古天皇21年(613)に「難波より京に至る大道を置く」と記録されたわが国最古の国道ともいわれる「大道」として歩み始めます。

中国や朝鮮半島のすぐれた文化は、この街道「大道」を通じて飛鳥の京にもたらされました。また、わが国から大陸に赴いた使者、「遣隋使・遣唐使」も盛んにこの街道を利用したことでしょう。このことから、わが国最古の国道「大道」は、外交上必要な道「外交の道」としてつくられたと考えられ、華やかな賑わいをみせました。

金岡神社のあたりを民族衣装に身をつつんだ人たちが往来していたかと思うと歴史の重みを感じます。このように外交の道として栄えた街道も、京が奈良の平城京に移ると、外交の道としての意味を失い、次第に衰えていきます。

しかし、堺が自由都市として栄えた中世には、堺と大和を結ぶ「経済の道」としてよみがえり、幹線道路として大いに賑わいます。

江戸時代に入ると、庶民による寺社(伊勢・大峰等)詣でが盛んになり、それに利用された竹内街道は「宗教の道」としての意味ももつようになります。

また、娯楽を兼ねた寺社詣でもするようになると、竹内街道はより広く知られるようになります。

時代とともに役割を変え歩んできた竹内街道をこの地域の人たちは生活道路として利用してきました。また、今も利用しています。

交通が現在のように発達していなかった大正時代には、田畑で収穫したものを堺の町に売りに行くため、リヤカーや肩引き車で荷物を積んで運ぶ姿が見られました。

このように竹内街道は、多くの人たちに親しまれながら歴史を今に伝えているのです。



金岡(金田)の歴史

明治22年(1889)金田村・長曾根村が合併して金岡村(昭和13年に堺市に合併)が成立するまでは、この地域は「^{かなた}金田」と呼ばれていました。地名から「金田千軒」といわれる大きな村落でした。

金田は「^{かなた}金太」ともいい中世には、河内国に属し、貞永元年(1232)の鐘名に「^{やがみぐん}河内国八上郡金太郷得勝寺」とあるのが見られます。

はじめは、幕府領であったが元禄7年(1694)甲斐谷村藩秋元領をはじめとして、幕末まで藩領体制が続きます。農業を中心として、竹内街道に沿い村落を形成していました。

平安時代の宮廷絵師で金岡神社に祀られている「^{こせのかなおか}巨勢金岡」は当地に住していたといわれています。

また、金田は日置荘・長曾根荘とならんで^{いもし}鋳物師の居住地でもありました。堺の豪商今井宗久は、永禄12年(1569)に吹屋(^{ふきや}鍛冶屋)の許可をめぐって「^{じない}金田寺内中」に書状を送っています。

このことから金田は室町時代に浄土真宗などの仏教寺院・道場を中心に形成された寺内町であったと考えられます。江戸時代以降も、この地域は竹内街道を通じて堺とも密接な関係を持ちながら発展をしてきました。

長曾根の歴史

河内国八上郡に属する長曾根村は、平安時代末より、京とのつながりが深い地域でした。保元3年(1158)に朝廷から石清水八幡宮に発せられた命令の中に、「河内国長曾根荘」が見え、このころまでには、石清水八幡宮極楽寺領の荘園が営まれていたことがわかります。

初めは幕府領であったが天和元年(1681)には大坂町奉行^{したら}設楽貞政領、元禄7年(1694)甲斐谷村藩秋元領となり、あとは金田村と同じ藩領となる。村内に秋元氏の陣屋が置かれていたと伝えられています。

発掘調査の成果でも、現在の地域での東に奈良時代から江戸時代の集落である長曾根遺跡があり、一部では、12世紀末から15世紀に至る寺院跡など、長曾根および中世寺院清浄光院(善龍寺・廃寺)との関連が考えられる遺跡が発見されています。

戦国時代、明智光秀らの河内若江城攻めと呼応して、織田信長の重臣柴田勝家が、寺内での「陣取り、放火、乱妨狼藉」を禁じており、この地域が相当大きな力を持っていたことがうかがえます。



善龍寺 柴田勝家書状 (天正元年・1573)

竹内街道と 金岡・長曾根



金岡神社前「歴史のみち」案内版



金岡小学校前タイル壁画



地域の文化財

かな おか じん じゃ
金岡神社 金岡町2866

竹内街道沿いに西面する金田の氏神で、住吉大神（すみよしおおかみ）・素戔鳴命（すさのをのみこと）・大山咋命（おおやまくいのみこと）などが祀られ、平安時代の仁和（にんな）年間（885～889）の創建と伝えられています。

平安時代の宮廷絵師の巨勢金岡（こせのかなおか）が祭神とされていますが、絵師を祭神とする神社は全国でも例がありません。

現在の本殿は、旧本殿が昭和9年（1934）の室戸台風で倒壊したため、昭和16年（1941）に建築史の大家天沼俊一博士の指導によって再建されました。

くすのきの大木に囲まれた境内は、金岡地域のシンボルであり、地域の人々の憩いの場になっています。



金岡の風物詩

金岡町では古くから五穀豊穡や町内安全を祈願し、祖先の霊を慰める風習から、盆踊り大会が行われており、金田の夏は盆踊りで最高潮を迎えます。

見どころは各町が繰り出す11基の大太鼓のパレードで、11基の大太鼓が勇壮な宮入りをした後、大太鼓の打ち鳴らすリズムに合わせて地元の音頭取りによる盆踊りが始まります。

また、秋には、境内で伊勢大神楽の総舞奉納が行われます。かつては、稲刈りの時期になると神楽舞の一行が、村の各家を訪れ神楽舞をするいわゆる「門付（かどつ）け」が行われていました。

その後、各町が金を出し合い氏神様に奉納をし、多くの人々が金岡神社の境内にむしろを持って集い、神楽舞を楽しんだそうです。

〈参考文献〉

田中金太郎『金田風土記（堺の農村）』（1987）



金岡町盆踊り大会



金岡神社 伊勢大神楽総舞奉納

かな おか ぶち あと
金岡淵跡 金岡町

金岡淵は、平安時代の宮廷絵師「巨勢金岡（こせのかなおか）筆洗いの淵」と伝えられています。今は埋められてしまいましたが、風光明媚（ふうこうめいび）な場所でした。

村の有志が昭和2年（1927）に公園として整備し碑を建立しました。かつて毎年5月3日に金岡神社で「画神祭」が行われていました。画神祭は巨勢金岡をしのび、画家が集まり絵を描くまつりでした。



埋立前の金岡淵



きん りん じ
金林寺 金岡町805

開かれた年はわかりませんが、寛文年間（1661～1673）に寺院としての体裁が整ったようです。金田では唯一の融通念仏宗（ゆうずうねんぶつしゅう）の寺院ですが、この頃、近在の北花田村澤池（さわいけ）家からは平野大念仏寺第43世の舜空（しゅんくう）上人（1660～1669大念仏寺住職）が出ており、その影響があったことも考えられます。



れん かい じ
蓮開寺 金岡町769

竹内街道に沿って南面して建つ蓮開寺は、永正6年（1509）西善の開基によるものと伝えられています。同じ金田村にある光照寺と密接な関係をもっていたようです。

主な文化財に親鸞聖人図、七高僧図、聖徳太子図、従如上人図（いずれも江戸時代）などがあります。



ぶつげんじ
佛源寺 金岡町2321

道仙という僧が法相宗（ほっそうしゅう）の寺院として建立し、14世紀前半頃、仏光寺第7世了源の代に仏光寺派に転じたと伝えられています。その後、寛永21年（1644）寺号が与えられ、貞享5年（1688）に現在の本堂が建立されるなど、今日の寺観が整えられました。



こうねんじ
光念寺 金岡町2357

真宗仏光寺派の光念寺は、平安時代末に源光信という人物が大津から金田に移住し開いたとされる由緒のある古い寺院です。

天保7年（1836）当時住職をつとめていた松野聖意は私塾「善学処（ぜんがくしょ）」を開設し、仏教・漢学・天文学などを教えました。今でも聖意が使用した望遠鏡などがのこされています。

その後、明治5年（1872）郷学校が置かれ、その後、河州第一番小学校（現在の金岡小学校）に引き継がれました。当時の教科書なども所蔵されています。



ちようこうじ
長光寺 金岡町2300

南北朝時代、至徳2年（1385）に草創された寺院を前進とし、文明2年（1470）道故が真宗の道場として開いたと伝えられています。

本尊阿弥陀如来立像は、脛（すね）より下の部分を別材で作り、本体に差し込む特殊な作りで、中に納められた文書から永享7年（1435）に修理されたことがわかります。ほかに新鸞聖人図などがあります。



応永10年(1403)創立、西蓮の開基とすると伝えられています。

現本堂は、館林藩秋元但馬守の家臣が母の菩提を供養するために元禄頃に建てられたものと伝え、「元禄拾貳」の欄間墨書があります。

部分修復が行われた内外陣境の本欄間には中国の孝行説話である二十四考から選ばれた場面が透かし彫刻されて大変見事です。



ぶつ ね はん ず
仏涅槃図

「仏涅槃図」は、金田の真宗
仏光寺派四箇寺(光念寺・佛
源寺・長光寺・西光寺)の共有
で、毎年持ち回りで営まれる法
要で使用されます。

江戸時代の享保16年(1731)
に作られたもので、裏面には
制作にかかわった金田村の
人々504名の名前が記されてい
ます。

作者は巨勢金岡より三十二
代の遠孫を名乗る巨勢隆栄
で、細部まで丁寧に書き込ま
れた秀作です。



こうしょうじ
光照寺 金岡町2207

光照寺は寺伝によればもと天台宗（てんだいしゅう）で、恵信僧都源信が開いたとされています。

山号ともなっている、「糸薄」（いとすすき）は鎌倉初期の歌人登蓮法師が、『徒然草』にも紹介されている「ますほの薄」（糸薄）をこの地に植えたことによると伝えられています。

鎌倉時代末の兵火により荒廃しましたが正順という僧が再建、本願寺三世覚如上人が逗留した14世紀中期に真宗に転じたようです。

本堂は明暦年間（1655～1658）の建築で市内の真宗寺院の本堂のなかでも最も古い時期のものです。



かんのんじ
観音寺 金岡町1086

かつては金岡の東、大道町の竹内街道沿いに位置していました。

播磨地方や堺市南部に多く開基伝承をもつ法道（ほうどう）仙人が開いたと伝えられています。沿革は定かではありませんが、寛文年間（1661～1673）に再建、観音寺と称したとの伝えもあり、不動明王立像（寛文2年・1662）が造立される頃までには、寺院として再興されていたのではないかと考えられます。



くすのきづか
楠塚公園（元西之宮） 長曾根町

「元西之宮」は金岡神社の頓宮（とんぐう・神様が一時留まれる仮宮）です。長曾根との村境に近く、竹内街道を東へ歩いてくると、大きなくすのきが目に入り、金田の西の玄関口でありました。

なお、現在は楠塚公園となっております。



ながそねじんじゃ
長曾根神社

長曾根町3014-3

長曾根神社は、八幡大神と牛頭天皇（ごずてんのう）を祀っています。由緒沿革等は定かではないが、長曾根・黒土の氏神として長く信仰を集めています。

二棟が並んでいる本殿は、棟札によれば享保5年（1720）の建立です。

両本殿に一對ずつ安置されている木造の狛犬は台座裏の墨書名から寛成3年（1791）に製作されたことがわかります。



さいこうじ
西向寺

長曾根町648

寺伝では、天正8年（1580）恵燈の開創と伝えられています。

現存する七高僧、聖徳太子、親鸞聖人図のいずれもが、大谷本願寺16世の一如上人の裏書があり、17世紀末に真宗寺院として、整えられたと考えられます。

境内の鐘楼と安永9年（1780）銘梵鐘は「治工泉 堀菊波出雲」（じこう せんしゅう さかいきくなみいずも）の陽鑄銘（ようちゅうめい）があり、貴重です。



しょううんじ
正雲寺

長曾根町679

開基や創建については、定かではありませんが、八尾別院の記録によれば、寛文8年（1668）寺号があたえられているようである。

建て替え以前の本堂の棟札が残されており、それによると文政12年（1829）僧慈眼の代に「金田邑大工多平長兵衛為恒」によって本堂が建立されたことがわかります。



地藏さんマップ



12 西御坊地蔵



13 東御坊地蔵



14 大道地蔵



16 延命地蔵(堂之辻)



18 光明地蔵



15 中之町地蔵



17 九頭神地蔵(芝之内)



19 如意地蔵(九頭神)



20 安産地蔵(二軒茶屋)





さあ!!
 金岡・長曾根の
 地域探検に出かけよう!!

☆地域探検したコースはカラーペン
などで書き込みをして、自分だけ
の地図を作ろう！
☆見つけた文化財をチェックして、
たくさん探検していこう！



昭和49年（1974）頃撮影



金岡町・長曾根町付近

北区では、ゆたかな地域コミュニティづくりをめざすため、まちの歴史と文化を学び、わがまちへの愛着と誇りを育む取組をすすめています。

このマップは、平成20年に北区域まちづくり推進事業実行委員会および金岡校区まちづくり委員が作成した「金岡・長曾根の歴史マップ～地域を知り・地域を巡るために～」をリニューアルしたものです。



西向寺梵鐘